

平成30年度 第2回北空知地域入退院支援研修会開催結果・評価

項 目	内 容
1 日 時	平成30年11月30日（金）18：15～19：50
2 内 容	1 事例紹介「在宅環境に問題のある方の在宅復帰支援」 安寿ケアセンター 夏井 聖典 氏 2 事例検討 「病院から地域（退院）、地域から病院（入院）時のタイムリーな情報共有について」 「本人・家族の思いに寄り添った在宅生活の移行支援について」
3 出席者	看護職34名、介護支援専門員28名、MSW・SW・相談員 7名、リハビリ職1名 保健師8名、ヘルパー1名、事務職3名 合計82名
4 結 果	1 事例紹介「在宅環境に問題のある方の在宅復帰支援」 ・一部手持ち資料あり。スライドで事例紹介を実施。 ・紹介後質疑の時間を設けるとともに、グループワーク時も巡回し質疑に応えた。 2 事例検討 ・15G、1G5人で検討を実施。 ・テーマ2点 「病院から地域（退院）、地域から病院（入院）時のタイムリーな情報共有について」 「本人・家族の思いに寄り添った在宅生活の移行支援について」 ・各グループにファシリテーターを配置。ファシリテーターは開始時刻前に集合し、役割を事務局からレクチャーし、事例検討では混乱なく活発に意見交換できていた。 ・看護職から「情報が足りず事例検討出来るのか」という不安の訴えが事務局にあったので、事例紹介後の質疑や巡回しての質疑応答で事例理解が深まっていたようである。 3 全体共有 ・各Gで検討されたこと、既に発表された内容以外で1項目を発表。自発的に報告するGや、司会にあてられて報告するG、検討結果は全て発表済み、と報告をしないGがあった。 ・各Gの発表はポイントを押さえ、他Gの発表内容と重複しない報告となっていた。 ・各G報告内容：「退院後の支援について、何が必要か」 4 G：安全確保する必要性 8 G：（ため込んだ物を活かして）一室を博物館のようにするのはどうか 13 G：健康面について判断する必要がある。再発の危険性等 11 G：配食サービスを活用し、その際に安否確認・見守りを実施する 9 G：在宅に帰りたいという理由を把握する必要がある 1 G：ゴミがあった方が寒くない？ 4 閉会
5 評価 達成度 について	企画 ○地域の入退院支援の課題に即した企画だったか→○ ※課題：①本人や家族の全体像を理解する力 ②本人の思いに寄り添い意思決定支援を実施できる力 ③本人や家族がどのような状態にあるのかアセスメントする力、の不足 ④医療と介護のタイムリーな情報共有の体制が整っていない (H30.7.30 小部会資料入退院支援研修会経過のまとめ・企画案より)

5 評価 達成度 について ○→達成・ 良かった △→ほぼ 達成・ まあまあ 良かった が課題あり ×→達成 できてい ない・良く なかった	企 画 <事例について> ・いわゆるゴミ屋敷で環境的にも身体的にも在宅移行は困難で施設移行を進めているケースだったが、本人が在宅復帰を希望したことで、院内の看護師やリハ職で在宅復帰の準備、リハビリをして自宅に帰ることができた。 ・院内多職種（病棟看護師、リハ職）の情報共有とサービス提供、病院地域連携室と地域のケアマネとの連携が在宅復帰につながり、情報共有の必要性を確認できる事例だった。 ・事例提供してくれたケアマネジャーの支援力が素晴らしく得るものが多かった。ケアマネ業務以外の対応もあり、サービスの網の目から外れるところは地域の課題として足りないサービスの検討や新たなサービスの構築に向けた検討をする機会が持てると良い。各市町の地域ケア会議と連動し、地域課題、サービスの構築の検討につながると良い。 <事例検討のすすめ方と結果について> ・テーマを2点（2「内容」参照）据え、①情報共有について ②入院中の移行支援について ③退院後の支援について各グループで検討。特に③退院後の支援について時間を多くとり検討した。テーマが検討しやすく良かった。 ・全体共有では本人の健康面をみる必要性、本人が在宅に帰りたいという思いの背景を確認する必要性、安全の確保等、多面的に情報確認し判断することや、本人の思いに寄り添う必要性についての発言が聞かれていた。 ・アンケートからも、本人の意思の確認、思いに寄り添う、どのような生活がしたいか確認する必要性等の記載があった。 ・事例検討の運営方法では、小部会において事例やすすめ方のイメージが共有出来ず、ゴミ屋敷問題に矮小化される懸念があったが、各ファシリテーターがうまく進めてくれた。 ・グループワークでは、多職種がいることで、色々な視点で考えられるのが良い。職種により見る視点や介入するところも違うため、その点を深めると対象の理解や連携の必要性が理解しやすくなり実践に結びつけられる。 ・グループでの記録は枠組みを決めず、自由に出来たのは抵抗感がなくて良かった。次回以降は個々人で記録するか、同様に模造紙を活用するかはGWのねらいに合わせて検討する必要がある。 以上から①～④の課題に即し、課題について検討する場を提供できた企画であった。 ○周知方法はどうだったか→○ 開催通知文にて周知。第1回より参加人数は減少している。（121名→82名） 今後の研修出席者の状況を確認していく。研修が定着することにより周知方法の再検討も必要と思われる。 ○会場の状況はどうだったか→○ ・参加者人数82名、会場の広さは適切だった。 ・記載するテーブルがあったため、用箋ばさみは殆ど使用していない状況だった。テーブルを使用してのGWをするには人数的にはギリギリ。 ・市立病院のGWの収容人数としては、5人×15Gが適正規模か。50名程度であれば模造紙に記録でき発表にも使える。定員を決めるべきか？ →今後の参加状況を確認しな
--	---

		がら検討していく。
プ ロ セ ス		○小部会の打合せ・準備状況→○ ・第2回研修会の企画会議を3回実施（10／11、11／7、11／26） ・1回目は第1回研修会の評価と2回目の方向性・事例提供者の選定、2回目は事例報告の具体的な内容の精査、3回目は最終確認として実施し、メンバーは日常業務で多忙を極めていたが丁寧に準備を実施できた。綿密に打合せでき、準備も適切だった。 ・運営に慣れてきているので、打合回数を減らし効率的に出来ないか要検討。 ・メール等でやりとりする方法もあるが、ディスカッションの必要性も意見としてあり、メール等で出来ること、部会を開催してディスカッションを実施することについて議題によって検討の手段を考える必要がある。 ○小部会のメンバーそれぞれが役割を遂行できたか→○ 事例提供者へのサポート、具体的な運営の企画・準備、事例検討の焦点・方向性の検討など、小部会で役割分担しながらすすめることが出来た。 ○ねらった参加者の参加→△ ・看護職、ケアマネジャーが大半を占めている。医療と介護の連携のそれぞれ要となる職種。 ・アンケート結果から経験年数は15年以上が半数弱を占め、10年未満が35%と少ない。経験年数の少ない専門職の参加が増えると良い。 ・比較的人数の多い事業所は複数参加で代わる代わる参加できたら良い。 ・大きな事業所では開催案内がどのように職員に伝わっているのか。 ・市立病院以外の医療機関の看護職の参加が少ない。→保健所主催の北空知地域看護連携推進会議の場で周知する。
結 果		○参加者数、職種→△ 看護職34名、介護支援専門員28名、MSW・SW・相談員 7名、リハビリ職1名 保健師8名、ヘルパー1名、事務職3名 合計82名 ・第1回研修会より参加者数は減少しているが人数は十分な参加者数だった。今後の研修参加状況を確認していく。 ・看護職及びケアマネ以外の職種は少ない。 ○参加者の満足度→△ ・アンケート結果から研修内容について「よかった、まあまあ良かった」の選択は98.5%。会場、開催時間、開催時刻についても同様に満足度は高かった。 ・経験年数の長い参加者の中に、開催時刻が遅く、時間が長いとの回答が何人かあったが、研修の内容を考えると1時間30分は最低限の時間。 ・限られた情報で事例をイメージでき、対象理解や課題への対応を自分たちで展開できている人は満足度が高かった。逆に、情報が足りない、事例のその後を聞いて何故答えを最初から言わないのかという意見もあり、そのような参加者は満足度が低いと思われる。 →事例検討のねらいのすり合わせ、自分の職種だけではなく多職種で検討し事例理解や支援方法を検討するという多職種連携の意義の理解を進めていくことが必要。

結果	・「自分だったらどう関わってほしいか」という人ごとではなく自分事として考えられることが支援者として必要な考え方である。 ・ファシリテーターのGW運営が良かったこと、事例提供者、運営側が会場をラウンドすることで、事例検討がより深まった。 ・全体共有での発表をひとつに絞ったことで発表しやすくなった反面、前のグループと重ならないように発表することが難しかった人もいたようである。全体共有は自由度を高く、負担を低くする工夫が必要。 ○タイムリーな情報共有の必要性和手段について語れたか→△ ・アンケート結果、GW全体報告結果から情報共有の必要性について理解をする発言や記載があった。タイムリーな情報共有についての検討はどこまで出来ていたか不明。入退院支援の際のタイムリーな情報共有について学ぶ機会が必要か。 ・Gによっては担当病棟看護師がいたこともあり、本人の変化に応じて施設から退院への情報を共有していたことが語られ、イメージしやすかった。病棟看護師も事例発表にあった家の写真のイメージはなかったため、地域との情報共有の方法等考えるきっかけとなっていた。 ○本人・家族の思いに添った支援について語れたか→△ ・本人の意思の確認、要望に添った支援、寄り添う、尊重するというキーワードがアンケート、GW全体共有で確認できており、語ることができたと考える。今後は実際の支援場面で本人の意思・ニーズを引き出す技術も必要。 ・本人、家族の思い等どこにあるかを想像しながら、本人が独居生活の継続を大切に、再発による入院をしないよう、生活環境を整えると言う視点で考えることができていた。 ・「自分だったらどう関わってほしいか」という視点があることで本人や家族の思いに寄り添えることにつながる。
まとめ	・入退院支援研修会（第2回）の目標は概ね達成できた ・当初はこの地域の支援関係者がGWはできるのか？というところから始まったが、前述した地域課題4つが研修に参加した支援関係者の中に根付いたと思われる ・GWのファシリテーターの関わりがとても良く、力量アップ、資質の向上につながった。 ・研修会の全体の流れはよい。昨年の入退院支援研修では事例検討を開催する必要性の意識付けがされ、今年度は自分たちで事例検討を進めていく方法・手段を獲得できた。次年度以降は効率化も図りつつ、事例検討を自分事として参加できるようなアプローチが必要である。